

松井健児

冴子

Saeko

京都芸術大学出版局

目次

晩秋の沼辺

晩鐘

美しきロスマリン

田島が原

記念祭

三溪園

インターハイ

クールベの女

泰西名画展
椿の森

あとがき

晩秋の沼辺

晩秋の陽は山の頂にかかり茜色の雲が沼面を染めている。緑の衣を脱ぎつくした梢は木枯らしに鳴いている。全く人影がない。靄が丘を包み、近影が墨絵のごとく神聖化されていく。風景の美しさを求めて逍遙している新一は、踊り疲れた白鳥が静かに木陰に憩うがごとく、白く余光に浮き出したその横顔に 身も心も吸い込まれながら立ち止まった。これは人形ではないだろうか？ ゆっくりと振り向いた白蠟の顔には 深い泉からほとばしり出た雫が二つ光っていた。

その頬に次第にほんのりと紅色が浮かび、固く結んでいるはずの唇に 何ともいえぬ愛らしさを感じながら 新一はそこに釘付けになった。

偶然！何という幸運であろうか！

彼は今まで この瞬間を求めて生きてきたと言ってもよかった。

咄嗟の衝動に駆られて 彼女の眼に許しを求めながら、遂に 傍の石に腰をかけた。

「何て馬鹿なんだ。俺はこの少女に何をしようといふのだ」彼は自問しながら ふと辺りを見回した。

そこには 何処かに几帳面さを含んだ異性が 軽く微笑んでいるばかりだった。

「どうして この俺の汚らしい服装に恐怖を覚えないのか？ 帽子の白線が好きなのだろうか？ 俺も随分心臓が強いもんだ。こんなところに二人で座っていると、誰かに見られたらどうしよう？」こんな事を思つてふと前方を見上げると、黒い影が近づいて来た。

新一は思わず立ち上がり急いで坂をかけ上がって行つた。後ろから付けて来る足音に振り返つた時、そこに再びそのセーラー服の少女を認めたが、道を廻るふりをして近くの間内に隠れた。

軽い下駄の音は、一寸も止まる事なく通りすぎ 師範の寄宿舎の方に消えた。

翌日、同じ場所に再び彼女を見付けた彼はいきなり話題を掘んで尋ねた。

「何年生でいらつしゃいますか」「二年です」もつと優しい言葉を期待していた彼はそのぽつんとむしろ突堅貪な言い方にどきつとした。やはり話しかけて悪かったのかしら、それにしても嫌な顔つきは少しも現れていない。

「ここでも何していらつしゃるのです」

暮の風は 房々とした緑の黒髪を撫でている。白蟻の顔には笑窪が二つ 笑みを含んだ玉の目が光っている。

「詩を作っているのです。あそこの黒い木々の影と湖面の光の対比。美しいとお思いでしょう」彼女は唇を歪め乍ら静かに言った。

「あなたは詩人ですね。僕も詩を作り度いと思うのですが、どうもうまく表現できません。自然の中に発見した 美しいものをスケッチしているだけです。表現できない情景は、そのまま頭の中にしまっておくのです」

「私も詩が出来る前に 呆然と頭の中に浮かんでくる この様な雰囲気が好きなのです」

二人の沈黙は暫くつづいたが、その間中新一は彼女の目を見ていた。

珍しく暖かくなっていた大気は 再びすっかり冷えて、時々吹き付ける風は恐ろしいまでに彼女の顔を白く浮き出させた。しかしそれはあの死人のような白さではなかった。その目元には何とも言えない可憐さが溢れていた。

「もう寒くなってきましたので私 帰ります。」立ち上がりながら軽く身震いすると、新一が今冴子と名づけた少女は沼の縁に沿ってゆっくりと歩きだした。迫りくる闇の中で 波頭のみが銀白に輝き、丘の上の家々の灯が湖面に揺れていた。

新一は寄り添って歩いて行った。暗黒の闇が落ちてきた。

晩鐘

静かに冬休みは過ぎて行つた。新一はもう二十日間も冴子に会っていないええなのが辛かつた。目の前に 白い滑らかな肌 澄んだ眼 高い鼻 純真そのものを示した顔の輪郭がちらついて離れない。

俺は恋愛を望んでいるのではない。異性との清い交遊を望んでいるのだ。

新一はそう信じた。

冴子の帰省先に送つた手紙には、「清い交際を続けながら、お互いが目指す芸術への道を進んでいこう」と書いた。それにはあくまでも清い友情で結ばれていなければならない、と強調した。

封筒の裏には新一と署名だけした。

再び会う日、約束の日、新一の心は早朝から鳴り続けていた。

まだ三時間も前だというのに、対岸の櫟の下まで来てしまった。

当然、冴子の姿はなかったが、もしかしたら来ないかもしれないと、ふと不安になった

クラナハの女のような冷たい白い肌、その上カラバツジヨの『リユートを吹く少年』に似た少女
としかみえない愛らしい顔に会えるのは 今か今か――。

もう二回も沼の周囲を歩いた。何という氣狂いだ。人は暖かい家の中で寛いでいるのに。約束の間はとうに過ぎてゐるのに。

こんな筈はない。急用でもできたか。それとも病氣かしら。

暮色は霧にとけこみ、凍天を弧雁が渡る頃、遠く鐘の音がたそがれて聞こえてきた。

彼は、いつの間にか 誰かの口調を真似て、口ずさんでいた。

待てど待てど友来たらず。朝な夕なに思いやり、永久の愛を誓えども、我 沼辺にありて闇の中を
さすらえば、無情な風が肌を刺す。